

第一分科 (醫史學)

會期 昭和22年4月6日

會場 大阪記念館講堂

分科會長 山崎 佐

幹事 大鳥 蘭三郎

開會の辭

講演

大鳥 幹事

1. 瘰癧史

大矢 全節

序論的研究として古今東西にわたる瘰癧を表現する言語を整理することから着手した。いはば瘰癧の言語學的研究とでもいふべきもので、中國の醫書には瘰癧の字の他に瘰癧を言ひ現はしたものが五六十種もあり、日本では片居、かつたい、なりんぼ等様々なる方言がある。西洋にも同様類の多種多様である。その結果としてハンゼンの樹膠菌發見以前には瘰癧と稱せられてゐるものゝ全部が全部瘰癧とは考へられず、その内には瘰癧類似疾患が少なからずあることに注目した。今後これ等を分類して言語を通じて親たる瘰癧の史詩考察を試みたい。

瘰癧の日本に於ける方言につき二三の質問追加あり。

2. ボンベの外科學講義 大鳥 蘭三郎

ボンベが安政4年(1857)に日本に来て公式の醫學教授を始め、醫學各科の講義を行つたことは既に明らかにされ、その内の病理學、生理學、藥物學の講義に就ては具體的に説明されたが、その外科學の講義に関しては未だ發表されてゐないので、ボンベ授講、松本良順譯述とある「外科學說」乾坤二巻によつてボンベの外科講義の内容を検討した。この「外科學說」乾坤二巻は外科總論の一部を記述してあるに過ぎないので、或はボンベの外科講義を殘らず記載してないだらうと考へられる。外科總論を外科通誌、外科各論を外科各誌と記し、この兩者の定義を掲げてその區別を説いてゐる。次で外科通誌の記述に移り、血液灌溉(コンヘスチヲ)、血脈充充(ヒーパレミー)の項と瘰癧(ヲントステキング)の條とを記載してゐる。血液灌溉を炎瘻の始兆となし、實痛灌溉と虚性灌溉の二つに分け、夫々の原因、症狀、處置、治法を説いてゐる。瘰癧に就ては分解、膿解、硬結、弛軟、腐

壞、壞瘍の6類に分け、夫々の症候、成因を述べてゐる。更にこの6種の瘰癧を身體の各部位に就て分類し、表皮、粘膜、肉乙膜等の瘰癧12種を挙げ、夫々の特性、療法を説き、療法として養生、藥劑、外術の三者を述べてゐる。今日外科學に於て行はれてゐる手術はこの外術に當つてゐるが、その内で最も賞用されてゐるのは瀉血法である。之を要するに「外科學說」はボンベの外科學講義を全部傳へたものとは思はないが、その所説は疾患の原因に就て特に詳しいことが注目され、又その立論の方式が一段と系統均であることが知られた。

3. 梶原性全と「萬安方」の成立

石原 明

鎌倉時代の代表的醫書である「萬安方」を精査し、又諸種の史料を探索して從來不明であつた梶原性全の行狀を略々明らかにすることができた。從來最も詳しく知られたのは藤井尚久氏の研究でその根據とする處は「極心方」(寶徳3年 A. D. 1451 中川子公著)の序文である。これによれば性全の中世末期までの學統が知られる。私は更に二三の史料から新しく發見した記事と「萬安方」の奥書とから次の如く改訂を要するものであることを知つた。

梶原性全 父母生國詳かならず、平氏の族、淨觀房と稱す。文永2年 A. D. 1265 生(逆算)、幼より博覽強記、長じて醫を和氣、丹波兩氏に學び、觀る處の方書二百有餘部、二千有餘卷、主に宋醫の學を好む。初め京都に居り嘉元元年 A. D. 1303 和文を以て從來見聞経験せしところを抄し「頓醫抄」50 卷を選す。始めて一門を立て臟腑の形狀を圖示しその大概を述ぶ。後鎌倉に移り横貫の請を蒙りて名聲大いに擧がる。正和2年 A. D. 1313 より2 年を費し「頓醫抄」増補し漢文を以て「覆載萬安方」50 卷を選し、家學の定本となして子冬景に授く。後増補して 62 卷となす。

蒲原宏理事長は最近書棚の整理中、昭和二十二年に大阪市で開催された第十二回日本医学会の翌二十三年刊行された会誌（三八〇頁、一、四〇〇部印刷）の中に、「第一分科（医史学）」と題する三頁が存在することを発見された。戦後の日本医史学会開催に関する最初の記事と考えられ、この時期の記録の探索は今後困難と見られることから、丁度五十年を遡る先人の記録を学会誌に収載する件を編集委員会に託された。ここでは最初の頁のみ縮小して前頁に示し、全体を本誌資料として縦組みに組み直して掲載した。なお旧字は新字に改めた。

第一分科（医史学）

会期 昭和二十二年四月六日

会場 大阪記念館講堂

分科会長 山崎 佐

幹事 大鳥 蘭三郎

開会の辞

大鳥 幹事

講演

1、癩病史

大矢 全 節

序論的研究として古今東西にわたる癩を表現する言語を整理することから着手した。いはば癩の言語学的研究とでもい

うべきもので、中国の医書には癩の字の他に癩を言ひ現したものが五六十種もあり、日本では片居、かつたい、なりんぼ等様々なる方言がある。西洋にても同様頗る多種多様である。その結果としてハンゼンの癩桿菌発見以前には癩と称せられてゐるものの全部が全部癩とは考へられず、その内には癩類似疾患が少なからずあることに注目した。今後これ等を分類して言語を通じて観たる癩病の史的考察を試みたい。癩の日本に於ける方言につき、二三の質問追加あり。

2、ボンベの外科学講義

大鳥 蘭三郎

ボンベが安政四年（一八五七）に日本に来て公式の医学教授を始め、医学各科の講義を行つたことは既に明らかにされ、その内の病理学、生理学、薬物学の講義に就いては具体的に説明されたが、その外科学の講義に関しては未だ発表されてゐないので、ボンベ授講、松本良順訳述とある「外科学説」乾坤二巻によつてボンベの外科学の内容を検討した。この「外科学説」乾坤二巻は外科総論の一部を記述してあるに過ぎないので、或はボンベの外科学講義を残らずに記載してないだらうと考へられる。外科総論を外科学誌、外科各論を外科学各誌と記し、この両者の定義を掲げてその区別を説いてゐる。次で外科学誌の記述に移り、血液灌漑（ラントステークング）、血脈充（ヒーベレミー）の項と焮衝（ラントステークング）の条とを記載してゐる。血液灌漑を炎衝の始兆となし、実症灌漑と虚

症灌漑の二つに分け、夫々の原因、症状、処置、治法を説いてゐる。痲衝に就いては分解、膿解、硬結、弛軟、腐壞、壞瘍の六類に分け、夫々の症候、成因を述べてゐる。更にこの六種の痲衝を身体の各部位に就て分類し、表皮、粘膜、沕乙膜等の痲衝十二種を挙げ、夫々の特性、療法を説き、療法として養生、薬剤、外術の三者を述べてゐる。今日外科学に於て行はれている手術はこの外術に当つてゐるが、その内で最も賞用されてゐるのは瀉血法である。之を要するに「外科学説」はポンペの外科学講義を全部伝えたものとは思はれないが、その所説は疾患の原因に就て特に詳しいことが注目され、又その立論の方式が一段と系統的であることが知られた。

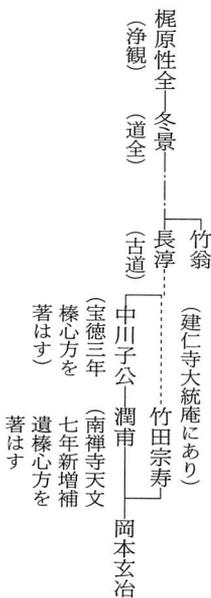
3、梶原性全と「万安方」の成立

石原 明

鎌倉時代の代表的医書である「万安方」を精査し、又諸種の史料を探索して従来不明であつた梶原性全の行状を略々明らかにすることができた。従来もつとも詳しく知られたのは藤井尚久氏の研究で、その根拠とする所は「棒心方」(宝徳三年、A・D・一四五一)、中川子公著の序文である。これによれば性全の中世末期までの学統が知られる。私は更に二、三の史料から新しく発見した記事と「万安方」の奥書とから次の如く改訂を要するものであることを知つた。

梶原性全 父母生国詳かならず、平氏の族、浄観房と称す。文永二年(A・D・一二六五)生る(逆算)。幼より博覧強記、

長じて医を和氣、丹波両氏に学び、観る処の方書二百有余部、二千有余卷、主に宋医の学を好む。初め京都に居り嘉元元年(A・D・一二三〇三)和文を以て従来見聞経験せしところを抄し「頓医抄」五十卷を選す。始めて一門を立て臟腑の形状を图示し、その大概を述ぶ。後鎌倉に移り権貴の請を蒙りて名声大いに挙がる。正和二年(A・D・一二三三)より二年を費し「頓医抄」増補し漢文を以て「覆載万安方」五十卷を選し、家学の定本となして子冬景に授く。後増補して六十二卷となす。性全時に六十二歳、視力を害せしも屈せず、日夜筆を執りて子孫の為に秘奥を伝ふ。建武四年(A・D・一三三二)一月二十二日没、時に年七十二。性全著はすところ「頓医抄」「万安方」の他、「保氣論」三卷、「薬名類聚」「照味鏡」各二卷あり。子孫相統いて医を伝へ、四世の孫長淳の門人中川子公に至り、性全以来の師伝を基となして「棒心方」を著はす。性全の学統は藤井氏により発表されたが、不十分の箇所あり、改めて图示すると左の如くなる。



次に、性全の代表作たる「万安方」の現存するものうち、最も原本に近く、信用のおけると思はれるものは多紀元簡の書写になる宮内省図書寮本で、これを精査するに従来の知見と異り、次の四の新知見を得た。

1、「万安方」はもと五十巻で次第に補遺や他の著作が混入して現存六十二巻となったものである。

2、現存「万安方」の第五十四巻の臟腑図は全く「頓医抄」

第三十四巻を挿入したもので、真の「万安方」はこの巻が欠けていた。

3、散佚した巻数は従来第八、十八の二巻とされてゐたが、第五十巻前半の五臟六腑病候形と第五十四巻医人大綱全巻も散佚してゐるので合計四巻散佚したことになる。

4、間接ではあるが張仲景の「傷寒論」を引き、私説を加へてゐる。これは「傷寒論」の名を明記した文献の嚆矢である。

4、宇田川榕庵とコレラ病

水田昌二郎

日本に於ける科学者の先達として宇田川榕庵の名は余りにも著聞しており、「植物啓原」「舎密開宗」等のその業績は日本科学史上に燦として輝いているが、医家の跡を継いだ宇田川榕庵の医学者としての学識を窺ふに足りるものがなかつたのは遺憾であるが、榕庵の医学的著述の一である「コレラ、モルブス説」の成立の由来を知る時は、榕庵が医学上に遺し

た功績が少なくなかつたことが理解される。文政五年日本に最初のコレラ病が流行するや榕庵は逸早くバタビヤ新聞に掲出されたボヴィールなる者のコレラ病に関する一文を翻訳して「コレラモルブス説」を著し、コレラ病の流行、症状、病理を説明してコレラ病の病防止につとめたのである。就中コレラ病の病理解剖上の所見を紹介してゐるのは病理解剖の實際に記してゐるものの初期のものとして注目される。

5、A、川本幸民伝 B、日本看護婦教育の指導者

ミス・リチャーズ

佐伯理一郎

川本幸民に就ては今回その伝記が編纂されたので詳しいことは同書に譲ることとし、ここにはその内の二三を述べるにとどめる。川本幸民は天才とも称せられた程早くからその才幹は傑出してゐたが、若年の頃は非常に短気でそれが為に過ちを犯したこともあつた。ミス・リチャーズは正式の看護婦教育を受けた人で、日本に渡来後日本に於ける看護婦教育の指導に當つてゐた。

この点に於てミス・リチャーズより前に日本に来て看護婦教育をなしてゐたミス・バラやミス・トルー等は元來が宣教師であつたのだから、その教へ方はミス・リチャーズのものより劣つてゐたものと考へられる。

6、織田信長の体質学的研究(1)

王丸 勇

織田信長の身体的体質たる顔貌、体格に就てはクラッセの「日本西教史」の記載と伝へらるる画像との間に食い違ひがあり、従来史家の間に異論があつたが、最も信憑すべき耶蘇会宣教師ルイス・フロイスの通信、与語正勝の寄進にかかる長興寺の画像、其他精神的体質である分裂性に類癩癩性を混へた気質からして、長身な細長型、或は細長闘士混合型と診断すべく、而も若年よりの鍛錬が加わつた為か、外見に似ず、その四十九歳で非命に仆れる迄は至極健康であつて、かの「日本西教史」の信長の体格に関する記載は太政官訳の誤りか、或は著者クラッセの誤解に基づくものと思はれる。

7、朝鮮医学史の研究

三木 栄

朝鮮医学史の研究が日本医学史や中国医学史の上から、ひいては世界医学史の上に必要なと考へ、約二十年前よりこの研究を始めたが、今回ほほ之を終へたのでその概要を述べる。

朝鮮医学史を本篇とし、朝鮮疫病史、朝鮮医事年表の三方面に就て研究を行った。

8、幕末の種痘功労者桑田立斎に就て

中野 操

幕末の江戸に在つて種痘普及に尽力した民間の功労者桑田立斎が、函館の医師深瀬洋春と共に安政四年幕命を受けて蝦夷人の地に巡回種痘を実施した事蹟に就て述べた。

尚北海道に於ける痘瘡流行の状況並びに疫疾そのもの及び種痘実施に対する蝦夷人の無智盲昧なる態度等につき、新しく立斎の嫡孫桑田権平翁より借覽した資料をもととして解説した。

9、仙台藩医学館沿革史補遺

山形 敏一

仙台藩に於ては宝曆十一年より学問所、後の養賢堂に於て医書講釈が行はれ、文化八年養賢堂の拡充の際に医学校が分離造営されることになり藩臣の子弟の養成に當つた。

講師(俗に学頭と呼ばれた)としては初代渡部道可、二代奥村玄安、三代河野杏庵、四代森井恕仙、五代原玄杏(八代再任)、六代大井長嘯、七代高橋養仙、九代小川草延、十代岡本祐庵が任命され明治維新に及んだ。

之等の学頭のうち京大富士川文庫本の「百一堂方函」と「微治小成」を検討することにより森井恕仙の事蹟が幾分明らかとなり、又湧谷玄恭の「御用留」により大井長嘯の引退のいきさつが明らかとなつた。

恕仙は渡部道可と河野緝庵（杏庵の養父）に医を学んだ後十年以上開業生活を送ったが、天保十五年「百一堂方函」を著はして学者的手腕を認められ、医学校施薬所長に抜擢され、弘化四年「徽治小成」を著はし、嘉永二年杏庵没後四代学頭に推された。又安政五年原玄杏が病氣退任するや長崎留学より帰った新進の大井長嘯が六代学頭に任ぜられたが間もなく役付選挙の件で助教一統と衝突し、部下に病氣一斎引籠を決行され、翌年奉養に榮進した形で退職した。かくて長老高橋養仙の短期就任後、玄杏の再任となったわけである。

10、明治期大阪に施ける解剖

小川鼎三

麻田剛立以来の大阪に於ける解剖学関係事項を挙げ、地元の士により一層明らかにされたことを期待する。

閉会の辞

大鳥幹事
以上